

2007 RWC 雑感

日本の 2007 RWC は終わりました。

第 1 戦対オーストラリア 91-3 大敗

Match Statistics <http://www.rugbyworldcup.com/home/fixtures/round=100/match=10075/>
2 番手選手チームの捨て試合。差が大きすぎた。切れてしまっはいけません。

第 2 戦対フィジー 35-31 善戦

Match Statistics <http://www.rugbyworldcup.com/home/fixtures/round=100/match=10083/>
勝ち点 1 は非常に大きい。必死に食い下がりました。データに善戦の軌跡を見ることがが
はます。

第 3 戦対ウェールズ 72-18 大敗 1 次リーグ敗退

Match Statistics <http://www.rugbyworldcup.com/home/fixtures/round=100/match=10094/>
「ミスもゲームの内」です。ランキング一桁のチームに 18 点はよくとりました (72 点は
取られ過ぎましたが)

第 4 戦対カナダ 12-12 引き分け 健闘

Match Statistics <http://www.rugbyworldcup.com/home/fixtures/round=100/match=10101/>
北半球のカナダとの戦に唯一期待していました。残念です。Japan and Canada draw out a
thriller という見出しが健闘を物語っています。
“What we did with the ball in those last few minutes was how we had wanted to play all game.”
smiled Kirwan.

ランキング上位のチームに対しよく頑張りました。健闘を称えるべきでしょう。日本代表が
RWC に出られただけでもよかったというべきでしょう。

RWC に興味を繋ぎちょっぴり夢を持たせてくれたことを感謝すべきです。

視点を絞っての RWC 中間私見です。

[メンバー編成]

日本はオーストラリア戦を捨ててフィジー戦にかけました。

フランスは第 1 戦アルゼンチンに対しメンバー構成を悩んだ末に 1 次はメンバーを入れと宣
言し豊富なメンバーをもちながら敗れた。開催国の早期敗戦は重大事であり、ショックが大き
く関係者の反省も大変だったでしょう。

常識的に外国とは国の名誉にかけても、相手に敬意を表す意味でも最高メンバーで戦うもの
です。捨て試合は、両方を放棄したうえに、自国の 2 軍選手に犠牲的精神で戦うことを要請す
るものです。歴史的にメジャー国の 1 ヶ月に及ぶ遠征ではテストマッチとエキビジョンの区
別をつけて主力温存の例はもちろんありました。RWC は、4 年に 1 回世界中が一場に集まって
ラグビーの普及発展を祝し、更なる発展友好に資するというお祭りの意義と、世界のランク
付けの二面をもっています。ランクづけ大会に参加する以上はランク向上に全力をかたむける
ことは当然のことで、変則的編成により目標を達成しようとすることを否定することはできな
いのです。

相手を倒したら勝ちでもなく、速度記録を競うのでもないラグビーは、一定の時間内に得点
の多少を競うもので、その時間内をより効率的に戦って総得点を競う競技では、時間の経過と
効率性の維持は重要な課題です。始めだけ良くて後途切れることは競技法の失敗です。相手の
戦い方に対応途切れることなく柔軟に対応する知恵と能力が絶対必要です。

ここで、RWC 発足の経緯をふりかえり問題点を再確認しましょう。RFU 創立 100 周年記念
の会は、RWC 実施へむけて一歩踏み出す会でもありました。それまでは定期的対抗戦と遠征
が大きなイベントでした。テストマッチはその時の全力で試しあうもので、友好関係を大事に
し友情を深めるもので伝統を大切にしました。それはラグビーの identity であったのです。ま
た、ノーサイドの精神もランキング付けの影に隠れてしまって形骸化してしまっているという
ことでしょう。W 杯は英連邦諸国の台頭とグローバリズムとともに RWC 開催の機運がたかま
り、古老ラグーマンたちの考えを押し切り、信望を集めていたウェールズのレイウイリアムの
賛成意見も大きく働き開催がまきました。世界ランキングも公表されるようになり、発展の
一途で今日に至っています。最近では試合数が増加の一途から減少の意見もではじめていま
すが 2 チーム制をとることが広まり大差試合が増加したら興味半減し観客減少につながるから
です。世界が一所に集まる以外に、地域大会としては欧州 6 ヶ国対抗が最も古く、そのほか南半
球のベスト 7 や 12 があり環パシフィックなどの地域大会も組織化されて現在に至っています。

小交流範囲における友好と切磋琢磨の道筋はついています。RWC も出場国が多くなって良いという反面、ゲーム数の増加による格差ゲームの消化に問題があらわれ、チーム数減少への意見もでています。26人から30人への登録人数増加は2チーム編成可能への道を開いた。商業ベースでみたW杯の問題もあります。外国人のメンバーもラグビー独特の思想のもとにみとめられています。捨てゲームとフランスの失敗はいろいろなことを考えさせてくれました。

[イングランドどうした]

「イングランドのキャプテンが出場停止の処分を科せられた」という報道は心が暗くなるものです。昔、イングランドは国代表チームの編成にあたり、先ず協会の役員たちが協議して、競技力だけでなく人物としても信頼のおけるプレーヤーをキャプテンにきめて、キャプテン中心にメンバーの選考を進めるとというのが常道でした。体格的にはチームの下位に属する温和ながら全員に信頼されているキャプテンにキャプテンシーの何かを学びました。寂しい話です。チームも南アに36-0ノートライに終わるなど一回優勝したからあとはどうでもよいといったRWC軽視の風潮がないとはいえません。

柔道からJUDOへ国際化し国際柔道連盟の理事選挙で日本の候補が落選した。発祥国の誇りにかけても頑張るって欲しいものです。一方、イングランドもラグビーの母国の名誉にかけても栄光の道を進んでほしいものです。来日しているケンブリッジ大も輝かしい戦果をあげていません。オケ大連合チームが来日した頃のことが懐かしいです。古きイングランドに尊敬と郷愁を抱く輩にとっては寂しい話です。

[power and flair]

パワーが前面に出ていた南アに理論的な戦い方が見られるようになったのは歓迎されるべき傾向です。激しくぶつかることが勝利への最短距離と考えられるpowerの時代から、interesting power+flair rugbyの時代に方向転換する兆しがみえてきました。

IRBが進めているルール改定の方向にpowerだけのnegative rugbyの否定がみられオーストラリアや南ア試みにもその意欲が伺われます。ルールが改定になってからではなく、改定の精神と方向制を認識し、改定に関心をもってGOOD GAMEの創造に努めることはラグビーを楽しむ為に、またラグビー人口増加を図るのに必要なことです。

第2戦の評に「接点を少なくするようにした…」とありましたが、全く同感です。「接点で負けない」ために、心と身体を鍛えることは大切ですが、もっと工夫し技を練ってボールを持って無策に当たって行く事を少なくすることも大切です。ボールを持って相手がぶつかってくる接点は必死でとめねばなりません。一方、接点を少なくすることは、日本人にあったプレーのひとつであって重要なことです。そして、もっと立ってプレーすることと、ペナルキーキックの反則とられないようにこころがけて、簡単にタッチにださず、ゲームを切らない努力は一連のもので、そのような作戦によって80分走り回り走り勝つチームづくりを目指すことが、日本のラグビー全体の向上につながり、ランクアップにつながる唯一の方策です。

30年ほど前の話です。NZオールブラックスが来日し日本代表に大勝したときに新聞は「黒い旋風」と言う表現をしたのに対し、「黒いそよ風」という言葉で反省をうながしました。日本は旋風に粉碎されたのではなく、微風になすすべもなく負けたのです。選手たちは必死でした。命をかけて戦いました。その選手たちが簡単にタックルが外されたのは、タックルポイントまでのball-carrierのフットワークとボールホールディングに惑わされ、さらに相手サポートプレーヤーたちの態勢の巧妙さによりタックルがきめられなかったのです。身体の小さい日本チームがやるべきことを、NZがやってきたのです。選手たちに本当にご苦労さんと頭を下がりました。

[AGGRESSIVE]

ウェールズ戦はインターセプトで一矢を報いました。インターセプトは偶然的プレーではありません。意識してやるものであり意識するからこそできるものです。100%タックルを考えているとインターセプトできる位置に立てないのです。ボールをうける相手クより内側に位置してボールをキャッチするのです。常に flair 発想を持ち続けることがインターセプトの前提条件です。

3人がかりで相手を止めている写真が新聞にのっていました。(相手の身体が大きく力強いことを物語るのによく使われますが)



asahi.com より転載

<http://www.asahi.com/sports/rugby/gallery/TKY200709210230.html>

ボールをもっている相手一人に対して3人かとりかかっているということは、15人対13人となり2人分バランスが崩れているということで、次の展開で不利な原因となるので、one for one があくまでも原理原則です。相手が強いから仕方ないといっているだけではいけません。分析すれば3人のうち、

- ・ウェールズ選手の下側へのタックルは失敗です。危険です。
ダメージも大きいですし、余分な疲労の蓄積となり息切れの原因になります。
- ・背面から捕まえようとしている選手は全く無駄といえないまでも余分な疲労蓄積を避け絶対必要な次の位置・プレーで活躍することに全力をつくすことです。
- ・リヤータックルしている選手だけで正当で十分なのです。

写真は勇敢に戦っている選手をアピールしたかったのでしょうか課題を含んでいます。

インターセプトもタックルも、一つのボールに対スルプレーが aggressive 即ち攻勢に転換していくために伏線となることが とくに求められます。aggressive tackle を単に激しい攻撃的タックルという考えはあらためなくてはなりません。

日本がランクをあげるためには、体格体力の向上が土台として必要であるわけですが、根本的に反省し、知識的にも技術的にも切磋琢磨向上をはかり、経験を積み重ねることで、size ではなく tough といいい残したマコーミックの心も忘れてはなりません。

2007. 10. 21

西川 義行